

Contents *****

特集：トランプ、ブッシュ、クリントンの物語	1p
<海外報道ウォッチ>	
当世 AI 事情の最先端	7p
<From the Editor> AI を使う日々	8p

特集：トランプ、ブッシュ、クリントンの物語

明後日 6 月 14 日は、トランプ大統領の 80 歳のお誕生日です。その後も 7 月にはブッシュ Jr. 元大統領、8 月にはクリントン元大統領の誕生日が続きます。この夏、全員が揃って満 80 歳になる。何とも不思議な偶然であります。

ベビーブーマー世代の先頭である「1946 年生まれ」から大統領が 3 人も選ばれて、それぞれ 8 年の任期を務める。それが①グローバル化、インターネット時代（クリントン）、②対テロ戦争、安全保障の時代（ブッシュ Jr.）、③反グローバル化、ポピュリズムの時代（トランプ）を代表することになっている。本号では、この 3 人の物語を整理してみたいと思います。こういう世代論は、日本人好みのテーマでもありますよね。

●エビアン G7 サミットの直前情勢

週明け月曜日から、フランスのエビアンで G7 サミットが開催される。筆者の自分用「年間予定表」には 6 月 14 日からと記してあったのだが、いつの間にか 15 日からに変わっていた。ニュースを検索してみると、6 月 14 日がトランプ大統領の 80 歳の誕生日なので、それに配慮して 1 日延期になったそうである。

しかるにエビアンサミットの成否は、トランプ氏の行動に懸かっている。去年のカナナスキスサミットのように、初日の日程だけで帰ってしまったら一大事。そこで議長役のマクロン大統領は、最終日の 6 月 17 日にベルサイユ宮殿でトランプ氏を招いての夕食会を検討しているという。確かにトランプ氏にはその手の「餌」が必要かもしれない。

とはいうものの、この話、ちょっと信じがたい。フランス外務省がトランプ氏の誕生日を忘れるだろうか？ 去年のカナナスキスサミットは 6 月 15 日からだったので、まさか「知らなかった」ということはあるまい。6 月 14 日はトランプ氏、6 月 15 日は習近平氏、というのは、外交の世界における「常識」だと思ふのである。

○近年の G7 サミット

回	51	50	49	48	47
日時	2026 6/15—17	2025 6/15—17	2024 6/13—15	2023 5/19—21	2022 6/26—28
開催場所	エビアン・仏	カナナスキス・加	プーリア州・伊	広島・日本	エルマウ・独
日	高市早苗首相 New !	石破茂首相 New !	岸田首相	岸田首相(*)	岸田首相
米	トランプ大統領	トランプ大統領 New !	バイデン大統領	バイデン大統領	バイデン大統領
英	キア・スターマー首相	キア・スターマー首相 New !	スナーク首相	スナーク首相	ジョンソン首相
仏	マクロン大統領	マクロン大統領	マクロン大統領	マクロン大統領	マクロン大統領
独	フリードリヒ・メルツ首相	フリードリヒ・メルツ首相 New	シヨルツ首相	シヨルツ首相	シヨルツ首相(*)
伊	ジョルジャ・メローニ首相	ジョルジャ・メローニ首相	メローニ首相(*)	メローニ首相	ドラギ首相
加	マーク・カーニー首相	マーク・カーニー首相 New	トルドー首相	トルドー首相	トルドー首相
EU	フォンデアライエン/コスタ	フォンデアライエン/コスタ	フォンデアライエン/ミシェル	フォンデアライエン/ミシェル	フォンデアライエン/ミシェル
経済問題	・成長、グローバルな不均衡 ・互恵的パートナーシップ ・重要鉱物	・エネルギー安全保障 ・デジタル転換	・AI ・中国の過剰生産問題 ・貿易	・経済安全保障 ・気候エネルギー、食料 ・銀行経営不安	・食料安全保障 ・エネルギーの「脱・ロシア」
政治問題	・地政学的危機への対処 ・児童に安全なデジタル空間 ・移民密入国・薬物・不正資金	・中東情勢の安定化 ・ロシア/ウクライナ問題	・ロシアの凍結資産 ・アフリカ開発	・法の支配に基づく国際秩序 ・グローバルサウスへの関与 ・核軍縮・不拡散	・気候変動への取り組み ・人権デューデリジェンス
国際情勢	・イラン・ホルムズ海峡封鎖 ・ウクライナ、インド太平洋	・イスラエルのイラン核施設攻撃 ・米関税交渉	・中東情勢(ガザ、イラン) ・ウクライナ支援	・ウクライナ支援 ・生成AIの進化	・ウクライナ情勢 ・インフレ対策
特記事項	・印韓韓ケニア招待	・トランプ大統領復帰 ・印豪ネシア墨韓南ア招待	・ローマ教皇が出席	・広島から「核なき世界」 ・ゼレンスキー氏出席	・NATO首脳会議の直前

昨年のカナナスキスサミットでは、7人中5人が「新参者」だった（ただしトランプ氏はいわば「帰り新参」）。議長のカーニー加首相もサミットは初体験、そして首相就任と総選挙からの日が浅かった。たぶんバタバタの議事運営だったことだろう。

その点、今回のエビアンサミットは、高市首相以外は全員がサミット経験者。さらにマクロン大統領は、2019年のビアリッツサミットを主宰しており、そのときもトランプ大統領を招いて苦勞している。事実、この年の議長総括は文字通りの「ペラ1枚」¹で、マクロン氏自身がペンを走らせてその場で格好をつけたとしか思えない。

ただし、今年はそこまで心配しなくていいかもしれない。近年の国際会議は上半期はG7、下半期はG20を中心に展開する。そして今年のG20は米国が議長国である。トランプ氏が議長を務める12月のマイアミG20サミットを成功させたいと思ったら、ここでG7首脳に喧嘩を売るのは得策ではあるまい。しかも米国のシェルパは、国家経済会議（NEC）次席補佐官のネルズ・ノーキストで、G7とG20の両方を担当している。だったらここは比較的シームレスに、年後半の日程に移行できるのではないだろうか。

○年後半の国際会議日程

6月15日～17日	G7エビアンサミット
7月7日～8日	NATO首脳会議（トルコ・アンカラ）
9月24日	習近平主席訪米、米中首脳会談
9月30日～10月1日	G20貿易大臣会合（米ミルウォーキー）
10月30日～31日	G20外相会合（米アトランタ）
11月18～19日	APEC首脳会議（中国・深セン）
12月14～15日	G20首脳会議（米国・マイアミ）

¹ <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000510476.pdf>

●3人の「ブーマー」大統領たち

さて、本号で取り上げたいのは、トランプ氏の誕生日のことである。とりあえずは80歳の長寿とご健康を寿ぎたいところだが、米国にはこの後、同じく80歳の誕生日を迎える元大統領が2人いる。

- * ドナルド・J・トランプ=6月14日（双子座）
- * ジョージ・W・ブッシュ=7月6日（かに座）
- * ビル・クリントン=8月19日（獅子座）

なんと3人全員が同じ1946年の夏生まれであり、年齢差は最大66日しかない。それぞれ8年ずつ、合計24年も大統領を務めることになったのは何という偶然か。

1946年は第2次世界大戦が終わった翌年で、米国がもっとも自信に満ち溢れていた年である。3人はいわゆるベビーブーマー世代の先頭で、生まれた場所はもとより、その後の人生行路も大統領になった経緯も、仕事ぶりもさまざまであった。

あらためて3つの人生を以下のように比較、整理してみた。見事に三者三様、「3通りのアメリカンドリーム」と言えるのではないだろうか。

	ビル・クリントン	ジョージ・W・ブッシュ	ドナルド・J・トランプ
大統領	第42代	第43代	第45代及び47代
任期	1993年～2000年	2001年～2008年	2017～20年、25年～？
生誕地	アーカンソー州 ホープ (南部の小さな田舎町)	コネチカット州 ニューヘイブン (東部の有名大学の街)	ニューヨーク州 クイーンズ (大都会の下町)
家庭環境	父は生まれる直前に交通事故で死亡。シングルマザー家庭で、祖父母に育てられる	父がイエール大学在学中に誕生した長男。祖父は上院議員。一族の中では「はぐれ者」？	裕福な不動産業者の5人兄弟の4番目。厳しい父の下で育つ。家業を継いでマンハッタンへ進出
学歴	ジョージタウン、オックスフォード、イエール大学ロースクール	ハーバード大学ビジネススクール	ペンシルベニア大学ウォートン校
寸評	地方出身の「成り上がり秀才」	典型的な「東部エスタブリッシュメント」	「不動産王」で「TVスター」から政界へ
経歴	アーカンソー州知事から民主党の新星として大統領へ。妻はヒラリー	父は第41代大統領。球団経営、テキサス州知事を経て「王朝」後継者に	ポピュリスト。MAGA派の支持で共和党を乗っ取り「トランプ党」に
政治的主張	民主党中道派。「大きな政府」の時代を終わらせる。「プロ・ビジネス」で貿易自由化を推進	共和党保守派。「温情ある保守主義」を標榜。9/11事件後に「テロとの戦い」を始める	「米国第一主義」「米国を再び偉大な国に」。反移民、関税など「反グローバルイズム」政策
信条	世界はひとつになる（グローバリズム）	米国は世界を率いるべし	米国は自分のことを優先すべき

●ベビーブーマー世代は何を見てきたのか

3人を主役とするドラマを作ったら、さぞかし面白い同時代史ができそうに思える。例えば、ケネディ大統領が暗殺された1963年11月22日、3人は揃って17歳の高校生である。それぞれどんな状況であったのか。

クリントン少年はその4か月前、地元選出のフルブライト上院議員の推薦による”Boys Nation”に参加し、ホワイトハウスでケネディ大統領に会っている。半袖ワイシャツ姿の少年が、大統領と握手する有名な写真が残っている²。「あれで政治家になろうと思った」とは、後年のクリントン氏の得意セリフである。授業中にケネディ暗殺を知ったが、「家族を失ったような気持ち」と回想している。JFKは文字通りの「ヒーロー」だったのだろう。

ブッシュ少年は、このときマサチューセッツ州の名門寄宿学校アンドーバーの生徒である。父はまだ政界入り以前で、テキサスで石油会社を経営していた。政党は違っても、ブッシュ家とケネディ家には交流があった。東部エスタブリッシュメントの世界とは、それくらい狭いものであった。ブッシュ少年にとってケネディは、ライバル政党の政治家というよりも、自分からそう遠くない場所にいる「若き指導者」だったのだろう。

トランプ少年は、ニューヨーク・ミリタリー・アカデミーの生徒である。厳格な父の意向で叩きこまれた厳しい学校で、スポーツが好きな目立つ少年だった。政治的な関心は乏しく、ケネディに憧れていたような形跡はない。それでも暗殺事件の衝撃は深く、「あれは誰にとっても恐ろしい出来事だった」と回想している。

何しろ3人は同世代である。米国史における重大事件を同じタイミングで体験している。ベトナム戦争には誰も従軍していない。クリントン氏はタイミングよく英国に留学して難を逃れた。ブッシュ氏は、テキサス空軍州兵になるという「裏技」を使っている。トランプ氏は、骨棘症というめずらしい病気を診断されて徴兵を回避した。要するに「みんなやってること」だったのであろう。

1991年の冷戦終結（ソ連崩壊）時には全員が45歳である。ブッシュ氏の父は既に大統領であり、湾岸戦争で見事な勝利を収め、一時は政権支持率が9割に達した。ところが景気はそこから下降曲線をたどり、92年の大統領選ではアーカンソー州のクリントン知事が頭角を現す。そして「阿呆、経済だけでいいんだ！」という掛け声のもと、衝撃的な逆転劇を演じる。ホワイトハウスを去る父を見て、ブッシュ氏は衝撃を受けたはずである。そして94年にテキサス州知事の座を射止め、共和党「ブッシュ王朝」の後継者となる。この時期のトランプ氏は、まだ純然たるビジネス界の人物である。

2001年、55歳で大統領になっていたブッシュ氏を「9/11テロ事件」が襲う。中東での戦争を始めることになるが、戦いは多くの犠牲を伴う。クリントン氏の妻、ヒラリーは既に上院議員であったが、イラク戦争を支持したことが尾を引き、2008年の民主党指名を逃してしまう。この時期、トランプ氏は実業界からTVスターに転じていた。

² <https://www.biography.com/political-figures/john-f-kennedy-bill-clinton-handshake-1963>

…などと、いくらでも続けられるが、3人の足跡は米国の戦後 80 年史そのものである。いずれ歴史家の手によって、3人を主役とする評伝が書かれることだろう。

もちろん映画でもいい。AIに3人の大統領を描くドラマのタイトルと宣伝文句を考えてもらった。出来上がってきたのが以下の3案である。

- * 第1案「1946年」～同じ年に生まれた。同じ国に育った。だが、それぞれ別のアメリカを夢見ていた。
- * 第2案「ブーマーズ」～3人の大統領、1つの世代、そして分裂した1つの国
- * 第3案「ホープ、イェール、クイーンズ」～希望の町、名門大学、不動産王の街。アメリカは三度みずからを選び直した。

さすがはチャッピー先生、家庭内トラブルの相談相手としてはともかく、こういう企画を考えさせると天下一品である。

●上の世代「2つの国葬」と比べると…

チャッピー先生いわく、この映画のラストシーンには2025年1月9日、ジミー・カーター元大統領の国葬を使うと良いらしい。

なぜならその場にはバイデン氏（43年生まれ）、オバマ氏（61年生まれ）、そしてブッシュ氏とクリントン氏という存命の4人の元大統領が同席し、その時点で次期大統領となることが決まっていたトランプ氏も居合わせたからだ。つまり46年生まれの3人も揃って、「この次に国葬になるのは誰か？」と見る者に問いかけるようなシーンであった。

カーターはしばしば、「失敗した大統領だったが、元大統領としては偉大だった」と評された。従って、国を挙げての葬儀となることに異和感はなかった。しかし「この次に国葬になるのが誰であるにせよ、「国の半分だけが嘆く」ことになるのではないか。それくらい、今日の米国社会の分断は根深いものになっている。

筆者はたまたま、2004年6月にロナルド・レーガン元大統領が亡くなった時に、出張で米国に滞在していた³。そのときの国葬は、本当に国全体が追悼ムードになっていたものだ。もちろん手放しの礼賛ばかりではなかった。印象に残ったのは、「自分は民主党員だが、レーガンは偉大な大統領だった」「政策には反対だったが、あの夫婦愛は羨ましいと思った」といった反応である。今では考えられないくらい「超党派」の反応であったのだ。

レーガンは1911年生まれ、カーターは1924年生まれである。ブッシュ父も1924年で、いわば「第2次大戦世代」である。彼らは大恐慌や世界大戦、徴兵、そしてその後の冷戦時代を体験している。だから「政争は水際まで」「いざとなれば国はまとまる」という感覚が残っていた。レーガンとオニール下院議長は昼間は激しく争いながら、夜になれば一緒にビールを飲んでいた、という時代である。

³ 溜池通信 2004年6月18日号「レーガンが愛された理由」を参照。

それに引き換え、ベビーブーマー世代が青春時代に共有したのはベトナム戦争、公民権運動、学生運動、ウォーターゲート事件などである。共通体験が「国を信じる側」と「疑う側」に分裂させる方向に働いた。ゆえに同じ世代の3人が、大統領としてはまるで違う方向を向くことになったのであろう。

- * クリントン：60年代リベラリズムの申し子→90年代のグローバル化時代を象徴
- * ブッシュ Jr.：戦後保守主義の継承者→00年代の「対テロ戦争」を主導
- * トランプ：反体制ポピュリズムの体現者→10～20年代の「反グローバル路線」を提起

●米国における「戦後80年史」に区切り？

こんな風を書くに、米国社会の分断の責任をひとつの世代に押し付けてしまうようで、いささか後味が悪い。今日の政治的分断には、メディア環境の変化やソ連という「敵」が居なくなったことなど、さまざまな理由があるだろう。そしてまた、米国は建国以来、「連邦か州権か」「南部か北部か」「保守かリベラルか」と、国を二分する対立には事欠かなかった。対立するのが当たり前、という人工国家ならではの事情もある。

ひとつだけ間違いないのは、次の2028年の大統領選挙が終われば、もう代代的な後戻りはないということだ。ヴァンス副大統領（1984年）ならミレニアルズ、マルコ・ルビオ国務長官（1971年）ならX世代となる。民主党側では、ギャビン・ニューサム加州知事（1967年）ならX世代、アレクサンドリア・オカシオ＝コルテス下院議員（1989年）ならミレニアルズとなる⁴。

- * Greatest Generation（偉大な世代）1901-1927生～レーガン、カーター、ブッシュ Sr.
- * Silent Generation（沈黙の世代）1928-45生～バイデン
- * Baby Boomers（ブーマーズ）1946-64生～トランプ、ブッシュ Jr.、クリントン、オバマ
- * Gen X（X世代）1965-80生
- * Millennials（ミレニアルズ）1981-96生
- * Gen Z（Z世代）1997-2012生

おそらく21世紀後半になれば、「クリントン～ブッシュ～トランプ」の3人はひとくくりにされて、「まだ米国が覇権を有していた時代の群像」となるのであろう。ちょうど今日のわれわれが、西郷や大久保をまとめて「明治の元勳」と呼んでいるように。

その先の米国がどうなっているのかは、見通すことは難しい。ただし相当に大きな変化があるのだろうか、という予感だけはあつた。

⁴ 米国では35歳以上でないと大統領選に立候補できず、さすがにZ世代は早過ぎる。AOCことオカシオ＝コルテス氏は36歳になったので、次回からの出馬資格ができた。

<海外報道ウォッチ>

当世 AI 事情の最先端

(観察対象：The Economist /NYT/ WSJ)

「Open AI と Anthropic と Space X」の3社が同時に株式上場を目指している。「資本市場がすっからかんになる」とか、「AI バブルもそろそろ崩壊か？」という声が出てくる。だがわれわれは、むしろ AI の早過ぎる進化を警戒すべきなのかもしれない。

まずは The Economist 誌の科学技術欄から、6/7 付の”**Will artificial intelligence soon escape human control?**” (人工知能は間もなく人間の制御を逃れるか?)⁵のご紹介。長文かつ難解だが、AI が人間の手を離れることで”RSI=Recursive Self-improvement”というプロセスが始まり、それを「ループが閉じる」(**Closing the loop**)と称することを覚えておきたい。

- * アンソロピックの上場は史上最大の IPO となりそうだ。同社の Claude には技術者の絶大な支持があり、5月に公開されたコードの4/5は Claude 製だという。量だけでなく質も向上。人間なら1日かかりの処理が、同社モデルは1時間弱でタスクを完了する。
- * 絶好調の同社は6/5、AI 開発を遅らせるべきだと世界に訴えた。周囲は懐疑的だが、経営陣は本気だ。2028年未までに、人間の関与抜きにAIが自ら後継機を生み出せる確率が6割ある。RSI (再帰的自己改善) プロセスの始まりだ。疲れ知らずのAIは短期間に超AIに飛躍しよう。AI 終末論者は、RSIで人類の運命は機械に委ねられると見る。
- * RSIを実現するには、今は人間が行っているタスクを自動化する必要がある。例えば、デジタル化されていない科学論文を入手することなどだ。人間抜きで、AI 単独で研究開発が進むようになれば、生産性は10倍、100倍、1000倍に加速しよう。
- * アンソロピックのカーパシー博士は、2019年のChat GPT-2レベルに高度な半導体を使い、学習を168時間から2時間に短縮した。このプロセスをAIエージェントに引き継ぐと、さらに高速化された。「私は何も手を加えていない」と同博士は言う。
- * モデルが高性能になれば高速化は進む。より繊細な知的作業も自動化に近づいている。人間の役割が縮小されるにつれ、コントロール不能となる可能性がある。MITのテグマーク教授は「高速道路で目を閉じてアクセルを踏み込むようなもの」と言う。
- * 現時点では、モデルの自己改善には物理的な制約が存在する。進歩のペースはデータセンターの開発速度に左右される。一般人によるAI利用も研究開発を遅らせる可能性がある。AIの限られた処理能力は、慎重に配分されなければならないだろう。
- * さらにデータ学習の問題もある。創造的な文章作成や法的判断などでモデルの精度を上げるためには、AIはなるべく現実世界から学習しなければならない。
- * 「ループの閉鎖」は、捉え方次第でユートピアにも破滅にもなる。

⁵ <https://www.economist.com/science-and-technology/2026/06/07/will-artificial-intelligence-soon-escape-human-control>

同社の近況は、5/28 付け NYT 紙の”**Anthropic Tops OpenAI to Become the World’s Most Valuable AI Start-Up**”⁶（オープン AI を抜いて世界一の AI スタートアップに）に詳しい。文末に、「本紙はオープン AI 社と係争中」と記しているのがいかにも NYT 紙である。

- * サンフランシスコ発のこの企業は、戦争における AI 利用を巡ってペンタゴンと対立した。「ミュトス」という強力なモデルを公開し、悪用が可能だと指摘した。レオ 14 世の回勅に助言を行い、教皇は「AI の破壊的影響から人類を守るべし」と警告した。
- * 今回の資本調達により同社の企業価値は 9000 億ドルに達し、OpenAI の評価額 7300 億ドルを上回った。3 か月前の 3800 億ドルという評価額の 2.5 倍である。
- * 同社の台頭は、オープン AI やスペース X との競争をさらに激化させる。3 社は近々 IPO を申請する。追われるオープン AI は戦線を縮小し、自社開発優先の方針に転じた。
- * アンソロピックは、AI 開発に必要な資材を製造するサムスン、マイクロン、SK ハイニックスなどを投資家として迎え入れた。計算能力の向上に寄与するだろう。同社の投資家リストには大手運用機関に加え、アマゾンやグーグルも名を連ねている。

アンソロピック社は、オープン AI から分かれた人たちが作ったと聞く。日本で言えば、吉野家とゼンショーのようなライバル関係か。抜かれた側の事情も気になるところで、以下は 6/9 付の WSJ 紙、”**OpenAI Files to Go Public in Test of Investor Appetite for Top AI Startups**”⁷（オープン AI が IPO 手続きを開始。AI 投資意欲の試金石に）から。

- * 2022 年にチャット GPT を公開し、世界的 AI ブームの火付け役となったオープン AI が IPO の準備に入った。サム・アルトマン CEO は、SEC に申請書を提出したことを明らかにした。早ければ今秋にも上場するが、具体的な時期は未定としている。
- * 3 社の中ではスペース X が先陣を切り、イーロン・マスクが世界初の「トリリオネア（1兆ドル長者）」となるだろう。アンソロピックは今秋にも上場見通しで、金融界ではオープン AI と先に上場した方が AI 業界を定義づける存在になると目されている。
- * オープン AI は消費者向けではまだ首位を維持しているが、直近では社内目標を達成できていない。この間に、アンソロピックが法人向け事業でリードしている。
- * 同社の財務実績は確認できない。シリコンバレー史上最大の資金調達を完了し、アマゾン、エヌビディア、ソフトバンクなどから 1220 億ドルを調達し、累積額ではアンソロピックを上回る。データセンター容量を積極買いしているが、利用料の支払いが履行できるのか。同社の現金消化率（Cash Burn）は、あらゆる企業を上回る見込みだ。

⁶ <https://www.nytimes.com/2026/05/28/technology/anthropic-tops-openai-valuation.html>

⁷ https://jp.wsj.com/articles/openai-kicks-off-ipo-process-in-test-of-investor-appetite-for-top-ai-labs-6951b99b?mod=hp_lead_pos3

<From the Editor> AIを使う日々

某月某日、政治オタク仲間が集まってディープな密談をしたのであります。こういうときに大事なのは「場所」でありまして、なるべく雰囲気の良い店で、お値段もまあまあのところで、できれば個室を予約したいものであります。たまたま幹事の役回りだったので、AIにこんなことを聞いてみました。

「某月某日夜、××駅の近くで個室が取れるところ。人数は××人で、会費がひとり××円程度で収まるところを探して、和洋中で1つずつ推薦してください」

さすがはAI、すぐに3つの店を紹介してくれました。その中でもイタリアンの店の条件が魅力的である。すぐに電話をかけて予約しようとしたところ、お店の人のいわく「すみません、ウチはこの値段では…」。おっととと、AIはどこを間違えたのだろうか？

話しているうちに、真相が判明。このイタリアンは大きな店なので、予約をインターネットサイトで小分けにして販売している。ホテルが、エクスペディアやトリバゴを使って部屋を分割販売しているのと同じ仕組みである。そういうサイトは割引料金で販売するので、お値段は平常料金よりも安くなる。ところが店にじかにお願いすると、そちらは定価販売なので条件が合わなくなってしまうのです。

つまりAIはインターネットだけを見て、そこに書かれている値段が正しいと思っている。しかしAIは自分が飲みに行ったり、おカネを払ったりはしないので、本当のところはどうなっているのかはわからない。いわば「豊の上の水練」で、みずからの経験値は限りなくゼロに近い。他人の形式知を真に受けて、もっともらしいことを言っているだけですから、くれぐれも鵜呑みにしてはいかんです。

その点、いろんなお店で飲食し、おカネを払ってきたわれら人間には、「あっ、ここはいい店！」とか、逆に「危険な人気店」や「ぼったくり店」という直感が働いたりする。何しろこれまでに幾度となく失敗をし、ときには高い授業料を払ってきましたから。結果として、お店に関する膨大な暗黙知が体内に蓄積されているのです。

ということで、AIが推薦してくれた「和」の店を選んで、高市内閣の前途などについて意見交換してきたのであります。お値段はほぼ予定通りで、お味の方もまあまあでした。要は使い次第ということになります。

ちなみに筆者が使うAIはいつもこんな感じです。

- * Chat GPT：仕事用。有料バージョンですが、最近値下げとなりました。
- * Google：簡単な検索はこちらで。最近、急速に親切になってきた感あり。
- * Grok：店の評判や競馬予想はここで。X情報を全部読み込んでいるのが強み。

アンソロピックの Claude や、日本製のサカナ AI は使ったことがありません。あんまり手を広げても收拾がつかなくなりますし、まずは自分自身の灰色の脳細胞を使うことを考えるべきでしょう。

それにしても本号では大いに AI に助けてもらいました。「**良い問いは答えよりも重要である**」（リチャード・ベルマン）という言葉思い出しました。

* 次号は 6 月 26 日（金）にお届けいたします。

編集者敬白

株式会社 溜池通信 吉崎達彦
〒105-0003 東京都港区西新橋 1-2-9 日比谷セントラルビル 14 階
<http://tameike.net> E-mail: kan@tameike.net